栽培漁業技術開発事業
タイワンガザミ（要約）

島袋　新功

1．目的および内容

タイワンガザミ資源の積極的な増加を図る目的で、人工種苗の放流効果調査と天然における資源生態調査を与勝海域で昭和59年度から継続的に実施し、栽培漁業の技術開発と事業化を図る。

本年度は、与那城村地先における天然稚ガニの定着数が約11万尾と少なく、その定着数を上回る約17万尾の種苗放流を行った結果、放流群が天然群より多く漁獲され、種苗放流の事業効果は大きいと判断された。

なお、本調査結果は「平成元年度栽培漁業技術開発事業調査報告書（沖水試資料No.111）」に報告したので、ここでは要約を示した。

2．要約

1)与那城村地先の干潟で、底網付きの海浜囲い網を使用して中間育成を行った後、3～4令期のカニ（平均甲幅7.4mm）169千尾を放流した。中間育成用の種苗は、沖縄県栽培漁業センターで生産した1～2令期の稚ガニ（C_1～C_2）670千尾を受け入れて使用した。

2)放流地点における放流ガニは、残留率が放流当夜で3.6%以下、3日後で0.09%と急速に低下し、非常に速く移動分散した。

3)本年の与那城村地先における天然稚ガニの定着量は約11万尾と推定され、例年より少なく定着時期も遅かった。

4)与那城村と石川市、沖縄市、勝連町、中城村におけるタイワンガザミの漁協当たり年間漁獲量は、7.6～2.9トン（6,557～2,347千円、50～16千尾）であった。放流海域に面する与那城村の年間漁獲量は4.9トン（4,528千円、34千尾）で、沖縄市に次いで多かった。

5)タイワンガザミの漁獲サイズは甲幅10～18cm、冬期に大型個体、夏期に小型個体が主に漁獲される。漁獲ガニを発生群毎に分離すると、1～4月は前年度前期発生群、5～7月は前年度後期発生群が主体である。当年前期発生群は7月から漁獲され、9月以降翌年4月まで漁獲主体となる。

6)タイワンガザミはカニ類中最も漁獲量が多く全体の8～9割を占め、カニ漁業の主要魚種となっている。その他にノコギリガザミ、ジャノメガザミ、アサヒガニ、シマイシガニ等が漁獲される。

7)本年の与那城村地先におけるタイワンガザミは、天然稚ガニの定着数が少なく、その定着数を上回る稚ガニ放流を行った結果、放流群の漁獲量が天然群より多いと推定され、稚ガニの放流効果は大きいと判断された。今後共、効果判定の基礎資料を集積して効果判定方法の確立を図り、放流事業の実証およびモデル化を行う必要がある。